「ワクワク」がつながる探究的な学び

岐阜市立岐阜東幼稚園（岐阜県）

「雪の中に入れた風船の水は凍らなかったけど、外に置いておいた風船の水は凍ったよ」。その話を聞いた子どもたちは、「なんで？」「氷作りたい！」と、早速、氷への興味が膨らみます。一人一人が自由な発想で試行錯誤そのものを楽しんできたそれまでのプロセス、経験のつながりが、“やってみたい”という、子どもの主体的な気持ちを引き出しています。遊びのプロセスを構造的に捉え、足場をかける保育者の援助が、子どもたちの「科学する心」を育んでいます。

「マイナスを感じてみたい～氷の不思議～」(5歳児／1月)

１月中旬「水を置いて、明日氷になっているか実験してみよう！」とＥ児たちが何に水を入れて、どこに置くのかを考え始めた。
Ｂ児「日陰は寒いからここに置いてみる。」と桶に水を張り設置した。
Ｉ児「ここ、いつも寒いよ。」と木の小屋の下にカップに入れた水を置いた。
Ｈ児　水を冷たくした方が凍りやすいだろうと予想、水の中に氷を入れた。
Ｊ児　日陰が涼しいという経験から、暗くした方が凍ると予測し、水を入れたカップの周りに黒い紙を貼った。
それぞれ、これまでの経験を基に理由を考え仕掛けていった。

翌日は雪混じり。登園してきた子どもたちが、仕掛けておいた水の水面を触った。「やったぁ、凍っている！」、「でも小屋の中は凍っていないね」「こっちは凍っているよ」「今日も仕掛けておこうよ。明日はもっと凍るかもしれないよ。」と、もっと作ってみたいという願いをもって遊び始めた。

「今日の気温と湿度は？」（５歳児／２月）

氷で繰り返し遊ぶ子ども達の遊びの拠点となるように、「たいよう氷実験場」を作り、どの子もが遊びに加われるようにした。
たいよう氷実験場に温度計を設置したことで、気温が３度を下回ると凍ることを知る。「マイナスってどれだけ寒いんだろう」と想像がふくらんだ。

２月下旬、朝の気温はマイナス１.５℃。
これまでずっと試していたパイロンに水を溜めたものをひっくり返すと、円錐の氷ができていた。
「こんな氷見たことない！」「こんな氷作れるなんて面白いね！」
予想を超えるものに出会う瞬間は、いつまでも余韻に浸れるほど魅力的だった。

先生に聞いてみました

ソニー幼児教育支援プログラムに出会うまでは、子どもたちが遊びの中で見つけた問いや願いに対して、「そうだね。」と共感することはあっても、探究につながるような援助までできていなかったことを反省しています。
子どものつぶやきや表情、目線などに心を留めるようになると、『もの・こと・人』に目を輝かせている子どもたちの姿に気付けるようになったと思います。
それがあり、この“氷の不思議”の実践では、子どもが冬休みに経験したことを聞いた時、思わずやってみたいと思ったのです。
これは、子どもたちと共に教師自身も探究心が高まってきていることを感じました。子どもと問いや願いに向かって遊びを創ってきた過程が教師の心を動かしたのだと思います。

また、教師間でも、子どもの探究する姿を楽しみにしたり、「こんな遊び方があるよ。」と教材研究したことを伝え合ったりして、園全体として「科学する心」が育っていったと思います。天候や気候に左右される遊びであったため、どうにか寒い日が続いてほしいと祈る毎日でした。
論文に書いた４つの実践では、子どもたちが様々な事物や事象に対して心を動かし、自分たちで試行錯誤しながらやり遂げようとする姿が書かれています。教師も心を動かし、子どもと紡ぐ生活に夢中になっていました。

↓論文全文はこちら

遊んで、遊んで、とことん遊び込む!!
心が動く瞬間（とき）に寄り添う
環境構成や援助を考える